

カントウータ

Cantuta

No.4

平成 15 年 11 月発行
(社) 日本ボリビア協会

協会からのお知らせ

1) 総会報告

2003 年 6 月 6 日(金) 平成 15 年度定期総会が開催されました。詳しい内容は、総会議事録をご覧ください。

2) 第 12 回パン・アメリカン日系大会開催

当協会理事・海外日系人協会副会長を務める長崎弘氏は、2003 年 7 月 24 日から 4 日間サンタ・クルス市で開催された第 12 回パン・アメリカン日系大会に出席されました。大会は、海外から 300 名、国内から 100 名、招待された公職のボリビア人 50 名、総勢 450 名参列という盛大なものでした(海外日系人誌 2003 年 9 月号から転載)。

3) サンタ・クルス中央日本人会への医療機器の寄贈

当協会会員永田晃氏の奔走により、サンタ・クルス中央日本人会に血球計算機他数種の医療機器が寄贈されました。同日本人会は、診療室を設置して、会員への無料診療サービスを実現したいと長い間検討していました。そこで、永田氏と(株)メディサン(福島県郡山市)の社長長尾嘉明氏が協議した結果、同社から医療機器の提供が実現しました。

4) 会費未納者へのお願い

会費未納の方は納入をお願い致します。納入には、5 月にお送りした郵便振

替用紙か、今回同封の物をお使い下さい。

5) 会員名簿作成資料のファックス送付願い

当協会では、会員相互の交流を深めるため、会員名簿を新しく作成することになりました。お手数ですが、同封の用紙にご記入の上、当協会までファックスをお願いいたします。

ボリビアの話題

1) 渡航自粛勧告の発令

2003 年 9 月 19 日以降、天然ガスの輸出に反対する農民、各種市民・労働団体による反政府運動が日々激しさを増している。10 月 12 日には、反政府団体と治安部隊の衝突により、死者 26 名、負傷者は 67 名以上にのぼり、緊張が高まっている。現在、ボリビア全土への渡航を自粛する勧告も外務省より発せられているため、事態の収束にはしばらく時間がかかると思われる。詳しくは外務省の次のホームページを参照されたい。
<http://www.pubanzen.mofa.go.jp/info/info4.asp?id=262#header>

2) ボリビア大統領辞任

10 月 17 日、サンチェス・ロサーダ大統領は辞表を国会に提出、受理された。大統領官邸筋によると、大統領は国外脱出の準備に入っているという。憲法の規定により、メサ副大統領が臨時大統領に就任した。

セルバンテスとボリビア (その1)

林屋永吉
(元スペイン、ボリビア大使)

もしもセルバンテスが新大陸に渡っていたなら、どんな「ドン・キホーテ」が書かれていただろう、と想像してみることは決して根拠がないわけではない。

1590年の5月、セルバンテスが国王カルロス5世に充てた陳情書を、インディアス枢機院の枢機官達がもう少し真剣に検討し、国王に然るべき意見具申をしていたなら、恐らく国王は彼が求めた新大陸での官職の一つを与えていたに違いない。それが実現していたなら、彼はドン・キホーテを刊行する15年も前に、勇躍インディアスへ赴いていたことになる。そうすれば「ドン・キホーテ」は世に出なかったかもしれないし、彼地で違った「ドン・キホーテ」が書かれたかもしれないのだ。

ボリビアの夕刊紙、ウルティマ・オラ紙の社長で文部大臣を務めたこともあるマリアノ・パウティスタ氏の夫人、カルメン女史は特異な画風をもって知られる閨秀画家だが、彼女はラパス市の一画廊で、「アメリカでのドン・キホーテ」と題する作品20数点を集めた個展を開いた。

ドン・キホーテとサンチョ・パンサがラパス市の名峰イリマニ山を背に町を見下している所や、インディオの女達が談笑している町の市場を散策する姿から、メキシコのマリアッチに興じているところ、ベネズエラでシモン・ボリーバルと歓談したり、あるいはボリビアの山中でチェ・ゲバラと話し合っているところ等々、時を超越したユーモアとそのナイーブな画風は大いに受けて、この国の展覧会では珍しいことに、殆どの作品に売約済の札が貼られた。

ところでそのセルバンテスの国王宛ての陳情書は、現在セビリャのインディアス文書館にセルバンテスの覚書として保存されている (Documentos Escogidos, legajo I, documento 74)。提出の日付はないが、覚書の裏面に1590年5月21付でインディアス枢機院長に回付されたことが記されているから、その数日前に提出されたものと考えてよい。覚書の左下にはこの陳情を検討した枢機官数名の署名があり、右下には検討の結果が1590年6月2日付で記されている。

覚書はかなり愚痴っぽく、綿々として過去の業績を述べ立て、これに対する恩賞がなかったことを訴え、インディアスにおいて目下空席になっている4つの職のいずれかに任命されるようにと陳情している。その全文をここに訳出して見よう。

「ミゲール・デ・セルバンテス・サアペドラは22歳の時より今日迄多年にわたり、海上或いは陸上の戦闘において陛下の御用を相つとめて参りましたが、特に海戦では多数の傷を受け、砲弾により一腕を失ったのであります。そしてその翌年にはナバリーノに赴いて後、テュニスの戦、ゴレタの戦に参加し、陛下より恩賞を与えられるようにとのドン・ファン王子トセーサ公爵の書簡を携えて王都に参ります途上、ガレラ船ソール号において捕虜となり、同じく陛下の御用を各戦闘において相勤めた弟と共に、アルジェーに連行されました。同地において両人は、身代金として、所持していた金も、両親より受け継いだ資産も、はたまた二人の妹達の持参金をも使い果たしましたが、この二人の娘達は、兄弟を奪回するために貧困に喘ぐ結果となったのであります。而して身の自由を取得した後も両人は、陛下にお仕え申し上げるためポルトガル王国に赴いて、サンタ・クルス公爵に従い第三軍団に入りまし

たが、その後現在に至るまでも、共に陛下の御用を相つとめているのであります。即ちその一人は、フランドスにおいて少将として、またミゲール・デ・セルバンテスは、モトガレ市長の書簡と通告状を携行し、陛下の命を奉じてオランに赴きました。そしてその後は所持する報告書にも明らかとなっており、セビリヤにおいてアントニオ・デ・ゲバーラの命により艦船の用務に従事しておりますが、この間にあって本人は何の恩賞にも浴した事がないのであります。

従いましてここに陛下に恭しく、目下インディアスにおいて空席となっております三乃至四の職の一つを与え賜らん事を嘆願するものであります。即ち、新グラナダ王国の経理官職、またはグアテマラのソコヌスコ州の知事職、或いはカルタヘナにおけるガレラ船団の経理者、またはラパス市の代官の職がそれであります。

陛下がこれらの職のいずれかをお与え下さる恩恵に浴しますならば、これを欣然拝受するでありましょう。即ち本人は有能かつ平価の恩恵に相応しい者でありますのみならず、永遠に陛下の御役に立つことを願い、其の生涯を本人の祖先と同じような姿において終えんことを望みますが故に、これを誠に大きな幸いかつ恩寵として受領するものであります。」(続く)

ティワナク再訪(その2) 30年ぶりのボリビア

大貫良夫
(元東京大学教授)
(リトルワールド博物館長)
(現在ボリビアにて遺跡発掘調査中)

ラパス到着3日目、やっとティワナクに行くことになった。昨日のラパスの1日が高度順化にはよかった。高度をまっ

たく感じなくなった。少し雲があるが、晴天である。エル・アルトの賑やかな町を出ると、見晴らしの良い高原になる。右の地平線の向こうにリアル山脈の雪の峰が連なる素晴らしい眺めである。ラパスを出て1時間半、ティワナク遺跡に着いた。

何台かの車がとまり、人影が見えるのはプーマプンクという小山である。ここはアメリカ人の若い考古学者アレクセイ・ヴラニッチと学生がティワナク村の発掘組合の人々と数ヶ月にわたって発掘してきたところと聞いた。1頭の白いリヤマがつないである。次第に人が増えて、ポンチョ姿の老人が現れる。どうやらこの人物が一番偉いようだ。

事前の説明が何もないので分からないままいろいろと聞いてやっと分かった。発掘作業の終了式をしようとしているのであった。火が燃やされ、メーサという布を広げ食べ物やココアの葉を置き、老人がアイマラ語で何かを述べ、やがてリヤマの首の付け根にナイフが入る。あふれ出る鮮血を何人もの人が器に受けて、それを持ってあちこちの発掘の穴に走り、隅に血を撒く。それで終わりである。

村へ場所を移して昼食だというが、少しの間を利用してプーマプンクを歩く。昔も見たはずだが、今回改めて、加工した石の大きさに目を見張った。綺麗に成形した石の壁を周囲に巡らせた大基壇である。上にあったはずの建築は後世に壊されて残っていない。かつては東側、即ちアカパナやカラササヤなど主要な大建築に向く側が正面と考える人が多かったが、今度の発掘で西側に大岩を加工した階段が見つかった。ティワナクの大建築は全て西側を正面にしていたようである。チチカカ湖の対岸にあるペルーを向く方角である。

基壇の東側にはいくつもの巨大な石

が乱雑に置いてある。ただし全てが磨き上げられ、加工されている。印象としては未完成の石である。これから建築に使うとしたのであろう。それにしても長さも幅も数 m、6 畳 8 畳にもなるのかという 1 枚石である。こんな巨石をどのようにして山から切り出してきたのであろうか。

村へ行く車が出ると急かされて、一旦見物は諦める。新しい石彫博物館を副大臣達と一緒に見学し、加藤君と私は村長さんから石彫を模した石の民芸品を戴いた。発掘隊の宿舎になっているレストラン・ウィラコチャの庭に発掘組合の農民 50 人くらいが集まっている。正面にはテーブルが置かれ、ラパスから来た我々が座る。先の儀礼で主役を務めた老人が組合長で、今度はスペイン語で挨拶をし、発掘を指揮してきたヴラニッチに謝意と賛辞を捧げる。ヴラニッチも組合の協力に感謝する旨の挨拶を返した。どうやらティワナク村の住民と発掘隊とは良好な関係を作り上げているようである。数ヶ月前の日本で、ティワナクは村、政府、考古局の関係が拗れて誰も遺跡には近づけないと聞いていただけに、この光景を見て大いに安堵した。

発掘区域ごとに班ができていて、各班長が報告書を組合長に提出した。各班の毎日の作業で何が出土したのか、それを組合員である作業員が記録し、考古学者が確認する。学者は自分でも記録をとり、報告も書くわけだが、組合員つまり地元住民も書いて、双方で確認し合う仕組みである。何故かと聞く前に、こうしておけば、考古学者が遺物を隠したとか、金が出たのに学者がアメリカに持っていったなどというデマや誤解は防げるという説明があった。どこでも遺跡発掘は地元住民との関係に神経を使う時代となった。

副大臣達もそろい、パチャマンカ料理

の昼食となった。各自に大きな豚肉の塊、ジャガイモ、サツマイモ、オカ(イモ)、バナナの蒸し焼きが供される。肉は手づかみにして食いちぎるようにしないと食べられない。ペルーだところでビールなどの酒がふんだんに出るところだが、ガセオーサつまり清涼飲料水だけなので助かった。海拔 4000m でお酒になると後が怖いと心配だったのである。ただし農民の中には庭の端で小瓶から何かを飲む人もいた。思うにサトウキビの焼酎カニャッソではあるまいか。このあたりでは薬用アルコールを水割りにすることも一般的らしいが、敢えて聞かなかった。

山のようなアカパナの大ピラミッドと「太陽の門」の石彫のあるカラササヤをひとわり見てラパスに帰る。その夜は佐々木肇大使ご夫妻のお招きで公邸での夕食。昼間の関係者達の多くが招かれた。美しく盛りつけされる日本料理の数々で賑やかにみんなの話がはずんで、散会は夜中近くであった。

明日以降の予定も目一杯で、大きな葦舟の進水式までであるという。この話は事前に聞いていない。いったい何事が起きるのか。

ボリビア百話

国土の大半を失った国

(その1)

高畑敏夫

(元ボリビア大使)

国土の大半の喪失

現在、ボリビアの国土面積は 110 万平方キロ弱だが、ボリビア側の主張によれば(中南米では、大多数の国の間で国境未確定の問題が存在したので、面積については、各国の主張に差があることが多かった)、独立時の面積は現在の 2 倍以上に当たる 234 万平方キロ強だった。即

ち、嘗ては面積で現在のアルゼンチン（日本の総面積の7倍半）とほぼ同じという大国だったが、その後、次表の通り総面積の過半に当たる124.8万平方キロの領土を失い、それらを割譲した相手は、隣接国の全てに及んでいる（単位、平方キロ）

相手国	武力喪失	交渉譲渡	合計
チリ	12.0万		12.0万
ブラジル	19.1万	30.0万	49.1万
パラグアイ	21.6万		21.6万
アルゼンチン		17.1万	17.1万
ペルー		25.0万	25.0万
合計	52.7万	72.1万	124.8万

上記の通り、面積から見れば、大半の土地は話し合いにより割譲されたものであり、その中には、マリアノ・メルガレホという悪名高い軍人大統領（1864-71）が、1867年にブラジルに対して行った領土割譲のように、同国の勲章を貰うことが主目的だったといわれるケースもあるが、割譲の対象となった地域の重要性から見れば、武力の行使ないしは威嚇によって奪われた領土の方が遥かに大きい。

豊かな天然資源が仇

現在のペルーやボリビアの地は、16世紀に南米大陸では他に先駆けてスペイン人に奪い取られているが、金銀等の豊かな富を有していたことがその主たる誘因の一つだった。当時ボリビアは、アルト・ペルー（高地のペルー）と呼ばれ、貴金属、特に銀の宝庫だった。特にポトシのセロリコは、山全体が銀の鉱脈からなり、Potosíという単語は、スペイン語で「途方もない富」という意味の普通名詞になったほどである。

そして、ボリビアが独立後に武力で領土を奪われた場合を見ると、そのいずれ

の場合も、当該地域の天然資源の戦略物資としての価値が飛躍的に高まった時期に隣国に奪い取られたという点で一致している。

独立後、最初に武力で失ったのは、太平洋のアントファガスタ県だった。1879年から83年にわたり、ペルー・ボリビア連合軍対チリの間で戦われた太平洋戦争の結果、チリに占拠され、1904年10月20日の同国との講和条約でその割譲が確定し、ボリビアが太平洋への出口を失って内陸国になったという点で、その意義はきわめて大きい。その後ボリビアは、ブラジルによってアクレを、またパラグアイによってチャコを奪われているが、現在ボリビア政府は、これら2つの「侵略行為」を「済んだ事」と割り切っているようで、領土の返還要求などは一切行っていないの対し、チリに対してだけは、両国間の外交関係を断絶した状態に保ち（大使ではなく、総領事を交換している。但し、在サンチャゴ総領事には、通常非常な大物が任命される）、且つ「海への出口」を主権を伴う形で与えるよう、2国間のみならず、国際会議等の場をも利用して絶え間なく要求し続けている。

硝石は唯一の天然の強力な酸化剤

ペルーの南部からチリの北部、コピアポ河の辺りに至る南北約1000キロの間は、アタカマ砂漠と呼ばれる世界でも有数の乾燥地帯を形成している。これは、南米の太平洋岸沿いに北上する寒流であるペルー海流（フンボルト海流）によって、空気が低温、乾燥化されることによって作られた海岸冷涼砂漠で、カナリア海流、ベンガラ海流、カリフォルニア海流、西オーストラリア海流等の寒流によってサハラ砂漠の西部、ナミブ砂漠、米国南西部の砂漠、オーストラリア西南部の砂漠（これらの砂漠は赤道を挟んで

南北のほぼ同緯度にある)などが形成されているのと同じ事情によるものである。

アタカマ地方は、現在ではほぼ全域がチリ領になっているが、嘗てはその北部の大きな部分はペルー領のアリカ県とタラパカ県、その南はボリビア領のアントファガスタ県だった。但し、アントファガスタ県の南部のチリとの国境線は未確定だった。これらの地域は現在世界屈指の銅資源の埋蔵を誇っているが、19世紀の後半、この砂漠の地下の浅いところに膨大な硝石層(カリッシュ層)が埋蔵されていることが明らかになり、また、時あたかも硝石の経済的・軍事的価値が飛躍的に増大したのと時を同じくし、一躍国際的な脚光を浴びることになった。

火薬やロケット燃料などのように、大気中の酸素に依存することなく大量のガスを瞬時に発生させる形で燃焼することが要求される物質については、燃料物質の他に酸化剤の存在が不可欠である。黒色火薬は、つとにギリシャや中国で別個に発達した火薬で、燃料として木炭と硫黄を、酸化剤としては硝石を使用してきた(これらの比率が15:10:75の場合に最も威力が大きいとされている)。

硝石(硝酸カリウム KNO_3)は、47.5%もの酸素を含む強力な酸化剤で、加熱によって亜硝酸カリウム(KNO_2)に変わり、その際に酸素を放出する。硝石資源は、チリ、スペイン、イタリア、エジプト、アラブ諸国、インド等の乾燥地帯に見られるが、地域的な偏りが大きく、概して言えば天然には存在し難い物質である。我が国には硝石の鉱床が存在せず、古代の日本においては唐天竺、即ち中国やインドが主生産地と考えられていた。

中国では、漢の時代には既に硝石が発見され、これを使った爆竹はその頃生まれたのではないかと考えられている。唐の時代には火薬が調整され、宋の太宗

(976-997)は、火薬を使った最初の武器を作ったと言われており、11世紀の中頃にできた『武経総要』という書物には、色々な火器についての詳しい記述がある。蒙古襲来時には、モンゴル軍が「てっぽう」と呼ばれる火薬兵器を用いて日本軍を悩ませている。(続く)

ボリビアで活躍する日系人

その1の4

官能的な詩

細野豊(詩人)

2001年10月、ペドロ・シモセは、林屋永吉大使のご尽力により、外務省の招待で来日しましたが、それは2度目の来日で、1回目は30年程前に楽器メーカー、ヤマハの招待でボリビアの民族歌謡の作詞者として日本を訪れたとのことでした。

2度目の来日の際には、日本詩人クラブの後援を得て、日本の詩人たちとの懇談会を行い、シモセが自作の詩(3篇)を朗読した他、活発な質疑応答が行われました。中でも、シモセの次の発言がとても印象的でした。

「私は生まれながらに楽観的で、プラトン型の理想主義者です。詩はユートピアであり、全ての人類の夢です。だから詩は死ぬことはありません。この楽観主義は、私が密林(セルバ)で生まれたことに由来していると思います。そこでは全てが人間的で、良い家庭がありました。私たちは貧しかったけれど、村の貧困は都会の貧困とは違います。都会の貧困は攻撃的、暴力的ですが、村では違います。私は今でも農民(田舎者)です。大学に行き、世界中を旅行し、文化関係の人たちを知ったことで、幾らか文明的になりましたが、今でも良い意味での野蛮人です。」

また、数人の日本の詩人たちから、彼

の詩と宮沢賢治の詩との共通性が指摘されましたが、これに対してシモセは、「宮沢賢治のような偉大な詩人と共通のものが、自分の詩にあることはとても嬉しい」と感謝すると共に、2000年に発行された、彼の官能的な詩を集めた最新詩集「きみはそれを信じないだろう」に言及し、危うく生命を無くしてしまいそうな交通事故に遭い、それがきっかけとなってこれらの詩が生まれたのだと語りました。

死に直面したことから、生の根源である性愛について書く衝動に駆られたということは、とても深いところ、即ち無意識の領域が重要な役割を果たしているのだと思われます。今回は、この詩集の中の「ジャズ」という詩を紹介します。

ジャズ(細野豊・訳)

おまえは時間の果汁を吸いながら
世界とその淫ら
について話す。

身体の中で聞こえる遠いトランペットの
こだま

脚の狭間をたどるサックスの愛撫
電池が
おまえのとても若い孤独を揺する。

振動の中で
ぼくらは
われを忘れる
何故男と女は自分を消し去るために
求め合うのか分からないまま。

(ぼくらは何故求め合うのか
何故愛し合うのか分からない。)

クラリネットがおまえの胸で呟き
ピアノは頭の中で錯乱する。

おまえの列車は誰も乗せずに出てしま
い

今夜おまえはぼくのベッドで

眠っているのに

ぼくのところにはいないのが分かる。

37 カ月間のラパス勤務(その2)

心に残る神々しいイリマニ山

杉山光男

(JICA 中部国際センター)

5. 余暇の過ごし方：釣・ゴルフ

何時の間にか身体が高地仕様になっ
て来た頃から週末には釣・ゴルフという
生活のリズムが出来上がって来た。高山
病の症状に見舞われていた着任当初に
は考えられなかったことだ。ラパスでこ
これらの遊びをやると、当然のことながら
全て「世界で一番高い所での」という形
容詞がつく。

釣はチリの国境に近いアンデス山系
サハマ山の麓の川に現地の日本人の「釣
バカ」によく連れて行って貰った。もの
はトウルッチャ(虹鱒)。アンデス山脈
の雪解け水を源流とする、ボリビアでは
珍しく澄んで冷たい流れだ。30mほどの
岩場を降り、川岸の土を掘って取ったミ
ミズを餌に釣り糸を流れに投げ入れる。
運がいいと心地よい当たりが暫く続く。
当たりが止まれば川の下や上に移動。昼
食は出掛けに女房が作ってくれたおに
ぎりや鳥のから揚げとビールだ。戸外の
澄んだ空気の中での食事は最高に美味
い。フッと気配を感じて岩場を見上げる
といつの間にやって来たのだろうか、そ
の辺りの先住民が放牧している 20 頭程
のリヤマの群れが、本当に真っ青な空を
背景にこちらを見下ろしていた。ここは
正にボリビアなのだ。

ラパスのゴルフクラブ。市内から 200

m程下りた場所にある。3600mの市内から200m下ったとしても高地に変わりない。そのクラブのスコアカードには誇らしげに「世界一高い場所に位置するゴルフクラブ」とある。石灰質の岩場に設計されたコースだ。コースには石灰岩が長い時間をかけ風雨に浸食されて出来た「月の谷」と呼ばれる奇妙な形の谷が数ヶ所ある。それは正しく「月の谷」。このクラブの傍に同名の観光名所がある。この辺りの風景は、か細いユーカリとサボテンとアロエ位しか生育していない、灰褐色の荒涼とした風景だ。しかし、クラブに一步入るとそこは想像を絶する別天地。緑が豊かで1年中何がしかの花が咲いている。

コース管理も行き届いており、乾期には地下水を汲みあげスプリンクラーで散水し緑を保っている。池が3ヶ所ある。うち2ヶ所は池越えコース。池にはアヒル、水鶏、ガチョウ、小魚が棲んでいる。時々、アヒルの家族がのんびりとコースやグリーン上を横切る。池越えホールが終わり次のコースに行く途中で、池ポチャボールを拾い集めたキャディーが「セニョール、安くしとくよ。買わないか。」と商売をしている。キャディーの手の中に小生のものと思しきボールをよく見つけたものだ。また、前述した「月の谷」を越さなければならぬ谷越えホールも2ヶ所。チョロってボールが谷底に落ちると忠実な(?)キャディーが滑るように谷底へ降りて行き拾ってきてくれる。この様にとても面白い設計のゴルフ場で日本のヘタなゴルフ場より数段綺麗で楽しい。我々は偶々ゴルフを知っていたお陰で日頃の運動不足をここで解消することが出来たし多くの方々とお付き合ひすることが出来た。

因みに、高地ゴルフは空気抵抗が少ないので飛距離がスゴイ。低地に比べ2番手は違う。日本に帰ってから数度ラウン

ドしたがあの頃の飛距離が恨めしい。飛距離に悩んでいる人は高い金を出してあれこれ高級クラブを買うより、HISの格安切符で「ラパスゴルフ場」まで一飛びをお勧めする。但し、高山病対策は十二分に。

という訳で、ラパスの思い出を思い出すまま書いて来たが、書きながら小さな思い出が次から次へと浮かんでくる。この調子では成田へ向け帰国するまでには紙面がもう少し要りそうだ。貴重な紙面を駄文で汚してもいけないのでこの辺で前半のラウンドを終わりにしよう。機会があったら後半ラウンドで。

じゃがいもの旅の物語

インカからジパングまで

その4

杉田房子(旅行作家)

普段の夕食は騒々しいまで賑やかなのに、その夜は物音を立てない競い合いのように静かだった。土間に伏せた籠で飼っている小兎のようなクイがごそごそし、戸外の土壁に擦り寄っているラマの立てる鼻息が、耳につく。

黙々と食事を終え、黙々と身内の者が帰っていった後、主の男は家の中を眺め回した。人がいなくなると、昼間までは山と積んであったじゃがいもが減って、土間が剥き出しの顔をしているのが目立つ。

「祭は、わしが帰って来るまで待て」

村中の者が、村長に申し渡されていた。

「それまで、食物を大事にする。特にチュノは、古いのも粗末にするでないぞ」

男は首を振った。男はチャスキの飛脚便が来ると崖際で叫んだ、早口の男だった。

年寄りと子供を寝かしつけた女が、男の傍に座る。女は、畑でじゃがいもを踏

む音頭を取り、広場でピラコチャが攻めて来ると囁いた、年嵩の女だった。男と女は、土間で寝ている年寄りや子供を見た。干し草で編んだむしろの上に、ラマやアルパカの皮を敷き、毛や綿を紡いだ布にくるまっている。積み上げたじゃがいもと、トウモロコシの袋や酒壺の間で、窮屈そうに、しかし暖かそうに見えた昨夜迄の寝姿が、急に減ったじゃがいもの隣で寒々しい。

アンデス産地の夜の冷気がラマの皮を垂らしただけの戸口から忍び込んできた。アメリカ・ライオンのピューマだろうか、獣の遠吠えが、長く尾を引いている。女は身震いして男を見た。男も、女を見つめる。

「あんだ」

女が低く言った。

「あんだ、村長さんと一緒に行くんだね。あんだ、帰ってきておくれよ。必ず」静まり返った暗闇の中で、くつくつと声を殺して女がすすり泣いた。

長いラマの列が、アンデス山地を下っていった。金銀からじゃがいもまでを運ぶ隊列は、村長が宰領し、村人が10人程ついている。

山道は険しい。家畜は小柄なラマとアルパカしかいないし、車輪というものを考え付かなかったインディオの道は、二つの場所を人間が歩く最短距離で結んでいた。

狭くて、階段も多いから、ラマはやたらに立ち往生する。

「お、パパスの実ではないか」

遅れる隊列に立ち止まった村長は、道端の緑に屈んだ。親指の先ほどの実が幾つか下がっている。根元を掘ると、根茎には小さくじゃがいもの瘤が膨らんでいた。

「野生だな。今頃パパスが実をつけるここまで下れば、皇帝の道も、もうじきだ」

山奥と違って、暖かい平地ではじゃがいもが年に二度採れるところがあった。太陽の祭が近いこの季節に実を成らすところまで下れば、アンデスの大通りと呼ばれる皇帝の道も近い。戦士10人が肩を並べて歩け、一日行程おきに軍隊が休める宿泊場所もある皇帝の道に出れば、道中はずっと楽になる。

しかし、その広い皇帝の道には、山裾の町を目指す隊列が殺到していた。毛織のズボン、大きな布に首穴を開けてすっぽり着る上衣、それに皮サンダルという男達の服装は同じでも、頭にした刺繍つきの帯や帽子を見ると、村長も知らない遠くからも来ている。

それは、のろのろ進む間に聞く言葉や食事の違いではっきりした。山奥では祝い事の御馳走の乾魚を、乾肉のように当たり前に食べている男達がいる。じゃがいもではなくサツマイモやヤムイモを料理する者がいれば、トウモロコシ酒を飲まないで蜜を舐めている者がいる。

「物売りが村で開く市より、いろいろある」

連れてきた村人で頭株の、早口の男が珍しく口ごもるのに、村長は苦笑した。

「だから、この国をタワンチン・スウユー4つの地方が集まる国と呼ぶ。少なくとも4つの違いがあるということだ」

皇帝の道は、サツマイモの葉が茂り、トマトやナスが彩る平野を突っ切る。村長は、干からびた山奥の畑と思い比べた。ゆったりと流れる灌漑の川を、石橋を渡る。早口の男は村外れの崖から見下ろす山間の急流と思い比べた。(続く)

ボリビアのクリスマス

田中ネリ (CGBJ)

ボリビアのクリスマスは、ナビダ (navidad) という言葉の響きがあってこそ実感が生まれるのは何故だろう。その

語源を辿ってみると、ナティビダ (natividad)、所謂「降誕」に由来している。そう、ボリビアの伝統的なクリスマスは、サンタクロースでもクリスマスツリーでもなく、やはりイエスの降誕を祝うに相応しく、ナシミアント (nacimiento) で始まる。

12月初旬から、各家庭で聖ヨセフと聖母マリアに見守られて飼葉桶に横たわる幼子イエスの粘土製の像が飾られる。ベツレヘムの羊小屋に宿る聖家族が降誕場面 (nacimiento) の登場人物だが、その周りに羊飼いと羊やロバのような動物、そして星に導かれて東方から祝いの宝物を持参する三博士 (Los Reyes Magos) の像が加わる場合もある。

キリスト教においてクリスマスは、イースターと共に重要な祝祭であり、ボリビアにおいてもそうである。ところで、何時頃からイエスの降誕が祝されるようになったのかに関しては、イギリス大百科事典によると、イエスが生まれた日は定かでなく、ローマのカトリック教会が5世紀頃、正式に12月25日を降誕の祝祭として設けたと記されている。12月25日とは、ローマで太陽の誕生祭に当たり、その誕生祭で、慣習となっていたプレゼント交換が取り入れられ、現在のクリスマスとなった。いずれにせよ、異教徒の文化や習慣を巧みにキリスト教へ取り入れていたローマ教会の政策が、クリスマスの原型を作ったらしい。

では、ボリビアのクリスマスに戻ると、街角からどことなく賑やかなクリスマスキャロルが聞こえ、プレゼントを探す人々で慌しくなる。ショーウィンドーにはたくさんの玩具が展示され、母親と手を繋いでいる子供は、玩具を食い入るように眺める。一方には、車の窓拭きやクリスマス宝籤 (lotería navideña) を売る子供がそばを通る。ボリビアは、コントラストの多い国である。

クリスマスイブの夜中、ポンチョ (poncho) やコートを纏い、夜の寒さを切りながら教会に向かう人々で街が一杯になる。夜中12時だというのに、教会は座る席が見つからないほど満員。深夜ミサ (misa de gallo) に参加して、イエスの降誕を祝う。ミサを終えると、人々は帰路を急ぐ。家に戻って食卓を囲み、熱々のピカーナ (picana) を食べながら家族の絆を確かめ合う。そう、クリスマスには、親、子、孫が一堂に集まり、賑やかに、しかも家族でしっとりと祝うのである。クリスマスの夕食を終えると、疲れ切った子供たちは翌朝開けるプレゼントを夢見ながら眠り、大人はプレゼントを交換してから話に興じ、時間の経つのを忘れて夜が更けていく。

ボリビア関係新刊書ご案内

服部真澄 著『GMO』上下巻、新潮社、2003年7月発行、各巻1600円(税抜き)。

GMOとは、Genetically Modified Organismsの頭文字で、遺伝子組み替え作物のこと。アメリカの21世紀の重要な「兵器」と見ることができるが、殺虫機能を持つジャガイモや大豆、北米アナポリスとボリビアの奥地における巨大企業とワインビジネスの間、遺伝子組み替え作物の未来を問う衝撃作である。

原稿募集中!

皆様から素晴らしい原稿を書いていたただき、おかげさまで紙面は充実しています。ボリビアについての原稿を是非事務局にお届け下さい。字数は多くても少なくても構いません。

編集委員

鎌田甲一 大貫良夫 杉田房子 細野豊